第 4 章

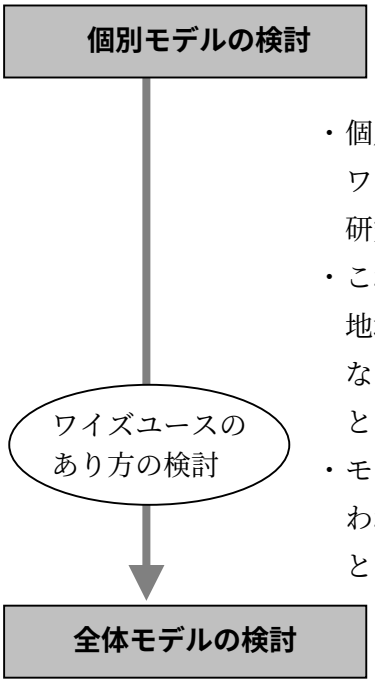
ワイズユースを実現するために
ー秋田から発信するワイズユースモデルー

第４章　ワイズユースを実現するために
－秋田から発信するワイズユースモデル－

１．ワイズユースモデルの基本的な考え方

本調査の目的であるコミュニティの再生と持続可能な地域づくりをめざした環境資源のワイズユースモデルを検討した。

モデル検討は、まず個別の事例や地域を例としてとらえた個別モデルを検討し、それら個別モデルの共通点等から全体モデルを検討した。



・個別モデルは、今回の基礎調査や受託研究の成果を踏まえ、環境資源のワイズユースという観点から参考となる既存の取組事例や、調査（受託研究、集落調査、社会実験等）の対象とした地域を取り上げた。

・これらの事例あるいは地域において、コミュニティの再生と持続可能な地域づくりにつながるワイズユースのあり方を検討し、それをどのようなステップで進めていくことができるかという視点からモデルとしてとりまとめた。

・モデルには、既存の取組をワイズユースという観点から分析し重要と思われる事項をとりあげた部分と、今後このような展開が可能ではないかという提案の部分の両方を含んでいる。

・個々のモデルの検討結果について、ワイズユースという観点から共通点等を抽出し、そこからワイズユースのあり方をまず検討した。

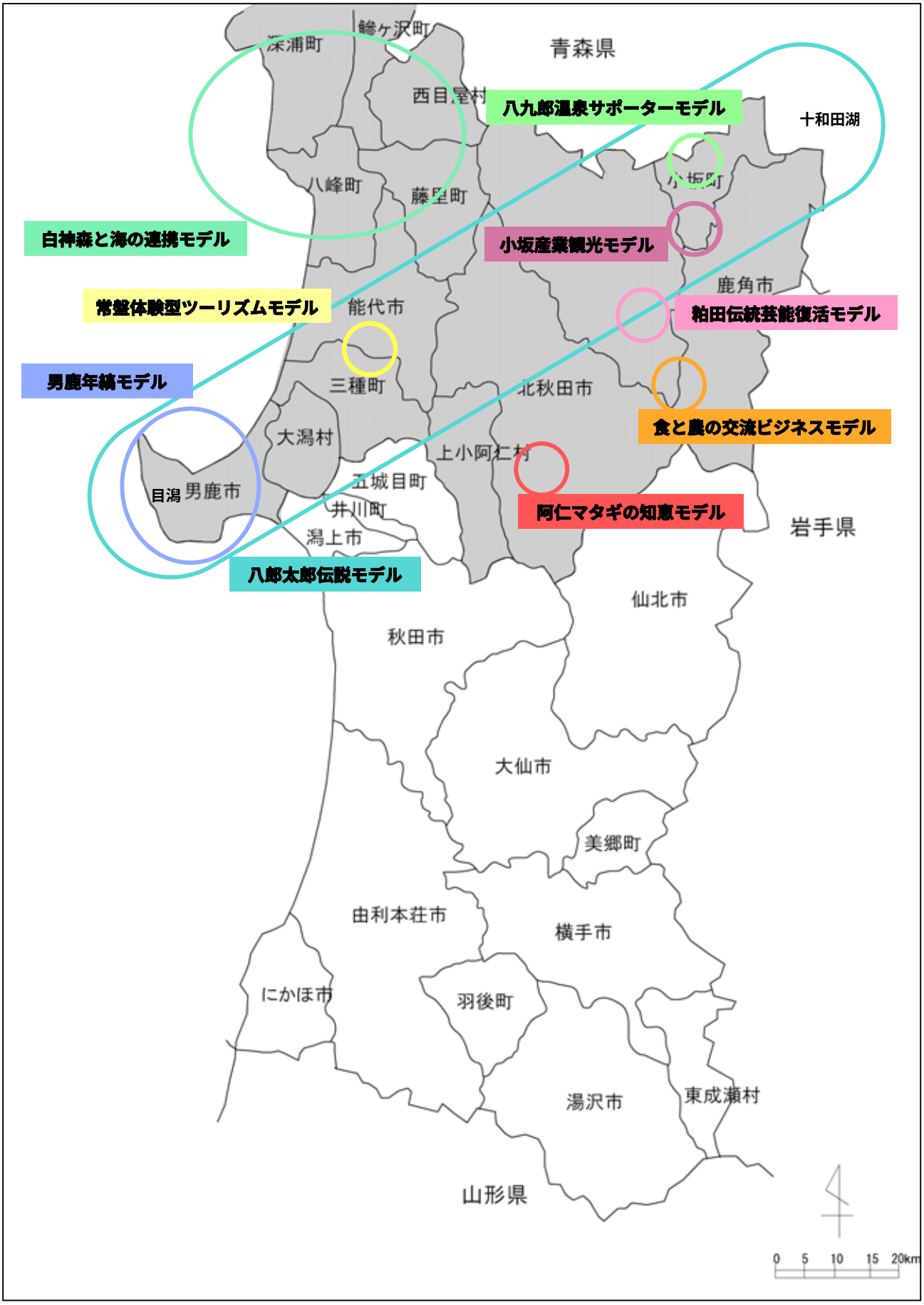
・その結果をふまえ、ワイズユースを実現する上での基本的な考え方や重要なポイント、基本的なステップ等を抽出し、全体モデルとして一般化を行った。

２．個別モデル

個別モデルとしては、下表の９つの事例・地域を対象として検討した。

個別モデル一覧

№	モデル名	モデルのめざすもの	ワイズユースのポイント	主な関連調査
①	**男鹿年縞モデル**	年縞を起爆剤とした「学び」と「地域産業振興」	・年縞に関連づけた地域の資源の再発掘、価値向上 ・男鹿版ゲオルートによる環境史の学び ・学びの観光、連携による地場の農林漁業振興	・年縞調査 ・フィールド調査 ・社会実験
②	**白神森と海の連携モデル**	世界遺産周辺地域の自然の保全と利用の両立、森と海の連携	・公共交通アクセスの提供や、ガイド付きツアーによる利用と自然環境保全の両立 ・エコツーリズムによる地域間連携、地域活性化	・分科会委員報告 ・林政史調査（長谷川委員） ・年縞調査
③	**小坂産業観光モデル**	エコタウンと産業観光から、循環型の地域づくりへ	・鉱山の技術を活かしリサイクル産業拠点形成と、産業観光 ・循環型の地域づくり、地元主導の地域づくりへの展開	・分科会委員報告 ・フィールド調査
④	**粕田伝統芸能復活モデル**	「毎月がまつり」の村の地域コミュニティの活性化	・地域の気づきと学校等と連携した伝統行事の復活、継承 ・グリーンツーリズム等の連携等、事業継続のためのコミュニティビジネス化	・フィールド調査 ・社会実験
⑤	**食と農の交流ビジネスモデル**	体験直売所で地域の食文化の継承と農業振興	・農家女性によるコミュニティビジネス ・体験型を取り入れることで食文化の継承と農業振興	・分科会委員報告 ・社会実験
⑥	**常盤体験型ツーリズムモデル**	都市農村交流のアグリビジネス	・地域主導のアグリビジネス ・グリーンツーリズムによる交流、活性化	・テーマ別研究（荒樋委員）
⑦	**八郎太郎伝説モデル**	伝説を活かした新たな学びのツーリズムと環境保全	・八郎太郎伝説による地域環境史への気づき、水環境保全プロジェクトの展開 ・伝説でつながる学びのツーリズム	・テーマ別研究（谷口委員） ・年縞調査
⑧	**阿仁マタギの知恵モデル**	地域のワイズユースの継承と担い手の育成	・狭いエリアの地元学による気づき ・地域のワイズユースの継承拠点（研究、人材育成） ・ワイズユースを活かした基幹産業強化、エコツーリズム	・テーマ別研究（熊谷委員）
⑨	**八九郎温泉サポーターモデル**	地域の環境資源と外部人材を活かした地域づくり	・外部の八九郎温泉ファンを活かした地域の活性化 ・外部のファンをふやす集落ＨＰの提案	・フィールド調査


青森県
十和田湖
八九郎温泉サポーターモデル
白神森と海の連携モデル
小坂産業観光モデル
常盤体験型ツーリズムモデル
能代市
鹿角市
粕田伝統芸能復活モデル
男鹿年縞モデル
三種町
北秋田市
食と農の交流ビジネスモデル
大潟村
上小阿仁村
五城目町
目潟
男鹿市
井川町
阿仁マタギの知恵モデル
潟上市
岩手県
八郎太郎伝説モデル
仙北市
秋田市
大仙市
美郷町
由利本荘市
横手市
にかほ市
羽後町
湯沢市
東成瀬村
山形県
0 5 10 15 20km

個別モデル位置図

（1）男鹿年縞モデル　～　***年縞を起爆剤とした「学び」と「地域産業振興」***　～

Ⅰ．年縞をきっかけとした気づき

■一ノ目潟の年縞ー「世界の年縞」
- **世界的にも貴重**なもの
- **３万年の環境史**がわかる
- **世界の温暖化研究**にも影響を与え得る

- 環境史、人と自然の関わりの**学びの教材**

例．菅江真澄が描いた絵の背景の環境がわかる

- 地域の**新たな観光資源**

■男鹿の自然、伝統・文化、食の発掘
- 菅江真澄の研究会、国交省による道標設置等
- 菅江真澄の食の再現、伝統食に取り組むホテル

↓

- **菅江真澄**を全国区に売りだしたい

年縞調査の今、男鹿の資源を見直す！

Ⅱ．年縞の価値のアピール

■国際シンポジウム
世界的な専門家が集う

■全国年縞サミット（仮称）
国内の年縞のあるところのリレーイベント

全国レベルへの発信
- マスコミ活用
- 教育教材作成

■年縞の研究の継続
地域の環境史、地球規模の温暖化のメカニズム等

■継続的に年縞の価値をアピールし普及する

一ノ目潟の年縞堆積物

国際シンポジウム風景

年縞を活かした「環境の学び」と
「男鹿の観光・産業振興」

Ⅲ．地域の人の学習

■地元への説明
- まず地元の人に知ってもらう
- 全集落説明会

■地元の学校での教育
- 子どもを通じて広げる
- まず、先生の教育

男鹿市では、ナマハゲ伝導士の資格認定

■年縞の語り部
- 年縞ガイドの養成、登録
  菅江真澄の解説グループ
  リタイアした学校の先生
- **男鹿ではだれもが年縞のことを説明できるぐらいにしたい**

■男鹿の自然、歴史、食文化等の再発見、地域の環境史研究
- 年縞から分かる環境史との関連づけ
- **住民自らが「調べる」ことで地域の自信につながる**

郷土食　あんぷら餅
（ジャガイモが材料
地元ホテルで出されている）

Ⅴ．地場の農林漁業との一体化

◆「食」のツアーへの組み込み
- 地場の素材を使った食
- 伝統の食
- 菅江真澄の食事

その背景の説明が大事

◆特産品の開発・販売促進
- 年間２００万を超えるツアー客を活かす
- マーケティング、ブランディング

後継者育成
産業振興

農業　漁業　林業

◆ 学びのツアーに来た人を継続的な男鹿の顧客に
- 特産品のネット販売等

Ⅳ．年縞の観光的活用

◆年縞博物館
- 年縞の現物展示
- そこから分かる男鹿の環境史の解説・展示

八望台ｏｒＧＡＯ近辺

一般観光客
県内外関心層
県内外の学校

◆ 男鹿　年縞　学びのルート（男鹿版ゲオルート）
- 自然・地質ルート
- 菅江真澄と歴史・伝統ルート等

※男鹿　真澄のルートイメージ参照

◆ガイド付き学びのツアー
滞在時間が延びることで滞在型に
- 大人の学びツアー
- 修学旅行、野外学習（県内）

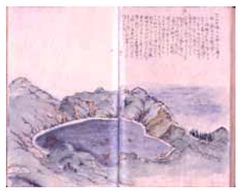
ガイド付きで、一般には行けない付加価値の高いツアー提供
例．一ノ目潟、お山かけ、海から見る男鹿

◆県北　環境史　学びのルート
- 火山・地質ルート　・遺跡ルート
- 八郎太郎伝説ルート　等

※県北　火山のルートイメージ参照

地域の人によるなまはげ実演
（伝承館　男鹿市）

菅江真澄が描いた一ノ目潟



現在の一ノ目潟

【男鹿年縞モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

◆概要

・「男鹿年縞モデル」は、一ノ目潟で掘り出された世界的に質の高い湖底堆積物（年縞）をきっかけに、地域住民の男鹿の環境と歴史への誇りと自信を醸成し、男鹿及び県北一帯を環境史の学びの拠点とするとともに、地域の食や特産品と結びつけることで観光をはじめとした地域産業の活性化につなげていく。

◆ポイント

・地域住民自身が年縞と男鹿の環境史を学び、男鹿そして秋田から直接その価値を世界に発信することで地域の誇りと自信を醸成する。

・男鹿及び県北に、年縞を核に、環境と人の関わりを総合的に学ぶことのできる、学びの拠点及びルートを形成する。

・地元住民のガイドによる学びのツーリズムと、地場の食文化、特産品等を結びつけることにより、滞在型の観光への転換、地域産業の活性化に結びつける。

①地域における気づき

ー一ノの目潟の年縞は世界の年縞ー

・年縞の解析・研究を通じて、男鹿や県北における宗教や戦乱等の歴史的事象や伝承の背景にある環境変化が明らかとなり、地域の資源の新たな意義や価値付けが可能となる。

・また、今回の年縞調査には世界中からの研究者が参加しており、世界の年縞の解析結果等との比較により、地球の気候変動の地域差等、今後の温暖化研究にも大いに影響を及ぼす可能性がある。

・このようなことから、従来から地域で行われてきた菅江真澄研究などとも連携し、これを地域住民自身が地域の自然や歴史を再認識するきっかけとする。また、国際的な研究成果を活かし、男鹿から直接世界に広くアピールするという発想のきっかけとする。

・なお、年縞からは十和田火山の噴出物が抽出されるなど、その成果は男鹿だけに留まるものではないことから、今後広く県北一帯で、年縞研究の成果をきっかけとし、連携した取組が期待される。

②年縞の価値のアピール

・国際シンポジウムを地元で開催し、年縞研究の成果と意義を国内外にアピールするとともに、年縞を育んできた地域の良さをアピールする。地域での認識を高めるためにも、外からの注目度を有効に活用する。

・国際シンポジウムを単発のイベントに留まらせないよう、国内の年縞が発見されているところと連携し、年縞のリレーイベントを開催する。これにより、年縞及び地域環境の価値を継続的にアピールしていく。また、年縞研究は温暖化研究とも結びつくことから、国内で開催される温暖化関連の国際的イベント等ともタイアップしてアピールする機会をもっていく。

・年縞の解析の継続とともに、地域の歴史的事象との関わりの解析、地球規模での温暖化メカニズムの研究との連携等を継続していく。これにより継続的な情報発信を行うとともに、地域住民や県民への普及にもつなげる。

③地域の人の学習

・男鹿では誰でも年縞のことを説明できる、ということをめざし、地域の全集落説明会など成果の普及を徹底する。

・地元の小中学校を対象に、年縞を通じた環境史の学習を行う（男鹿水族館ＧＡＯでの企画展示シンポジウム記録参照。p.146 及び個別調査編　第６）。また、そのために、まず教員への教育を行う。
・年縞研究成果と関連づけて、地域住民自身の男鹿の自然、歴史、食文化等の再発見の取組を促す。地域住民自身が調べ、年縞から明らかになる環境史との関連づけを行うことで、地域の自信につながる。
・地域住民等の中で、年縞のガイドを養成する。現在、菅江真澄の研究や解説を行っているグループ、リタイアした学校の先生、今後リタイアが予想される団塊世代などを核として展開する。
・年縞ガイドに係る人材育成には、男鹿市で実施している「ナマハゲ伝導士」の取組が参考となる。

■ナマハゲ伝導士
趣旨：ナマハゲ伝導士試験を通して、ナマハゲ本来の持つべき意味合いを正しく理解してもらう機会とし、ナマハゲを深く知ることで内外に対して保存伝承意識の高揚とサポーターの育成に繋げ男鹿の観光振興に繋げることを目的として実施するもの。
実施方法：なまはげ館の視察、講義等の後、試験。各年定員制
受験料：6,000 円（H18 の場合）
実施機関：男鹿市観光協会　ナマハゲ伝導士推進委員会

④年縞の観光的活用
・目潟に近い場所に「年縞博物館（仮称）」を整備し、実物の年縞を展示し、環境史の学びの拠点とする。（ドイツ・マンデルシャイトの例参照（p.148））
・男鹿は、自然、歴史資源に恵まれており、これらと年縞の成果を関連づけ、地域の環境史を総合的に学ぶことができるルートを設定する。とりわけ、男鹿はあらゆる年代の地質がみられるといわれ地質標本地を巡るルート、菅江真澄の足跡や真澄が描いた絵の場所を巡るルートなどが考えられる。また、ガイド付きのツアーを実施し、通常は水源地のため立ち入りが制限されている一の目潟、山岳信仰の場であり修験者が通ったお山かけのコース、海から男鹿を見るコースなど、通常では通行や利用が制限されているところにも行けるようにし、付加価値を高める。
・県北の火山、地質の露頭や化石産地、遺跡、あるいは八郎太郎伝説と年縞からわかる環境変化を関連づけ、県北広域の環境史学びのツアールートを設定する。
・これらの対象としては、県内外の学校の修学旅行等学習旅行、一般観光客、環境や歴史に興味のある関心層などが考えられ、対象者の興味の度合い等に応じた学びが実現できるプログラムを展開する。

⑤地場の農林漁業との一体化
・しょっつる、ハタハタ等地域特有の食文化や伝統食等をツアーに組み込み、これら伝統食、郷土食を生み出した環境条件や歴史的背景等とあわせて、学びの対象とする。
・地域の食材、伝統文化等を活かした特産品開発、ブランド化等を行う。
・来訪者への特産品のネット販売等、年間 200 万人を超えるツアー客を活かしたマーケティングを行う。
・これらを通じて、地域の農林漁業振興、後継者確保につなげる。